

とみや歴史散歩

其の五

「富谷の交通」～富谷宿開宿までの系譜 中巻～」

7月号に続き、今回は仙台藩主伊達政宗公が奥州街道を整備し、今年開宿400年を迎える富谷宿が誕生するまでの経緯を紹介します。

1601（慶長6）年、岩出山城に居城していた政宗公は、新たに仙台城の築城を始めました。その際、伊達家を繁栄させる戦略として、自分の子どもや家臣を領土内に散らし、領地を与えました。そうすることで、伊達家が簡単に滅亡しないようにしただけでなく、領土を効果的に統治する狙いがありました。

富谷宿開宿直前の1616（元和2）年に、政宗公は三男の宗清に吉岡の領地を与え、宗清は吉岡城の築城を始めました。宗清が吉岡に入城すると、政宗公が居城する仙台城下と吉岡の間が遠くなるため、街道を整備する必要が出てきました。

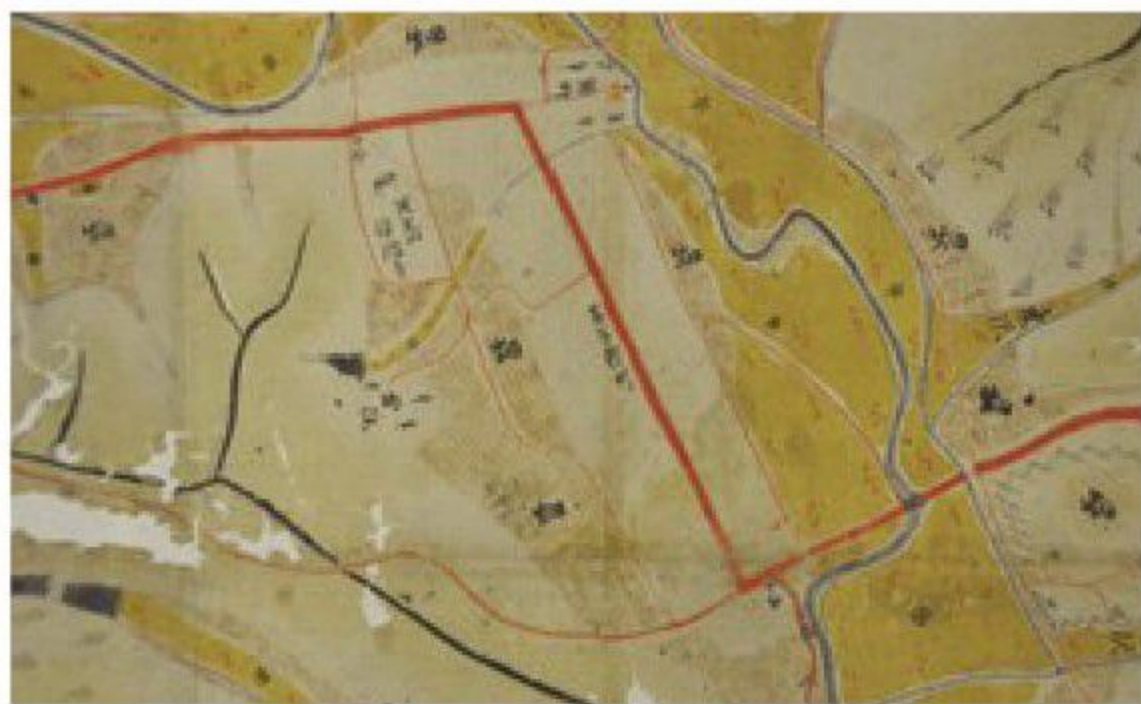
そこで政宗公は、1618（元和4）年に幕柳村（現在大和町の鶴巣地区）で農家をしていた内ヶ崎筑後（後の内ヶ崎織部）に、富谷に宿駅問屋場（宿場）を開くよう命じ、後に奥州街道と呼ばれる公道の整備が進められました。

1618年頃の富谷宿の家屋数は、十数軒であったと言われています。規模が小さかったことから、吉岡宿に協力をもらい、馬や人を借りていたと考えられます。富谷宿は、徐々に家屋が増えていき、1620（元和6）年9月13日、ついに政宗公の書状を受けて、正式に吉岡宿から独立した宿場となりました。

この書状を受けたことにより、荷物を運ぶ人や旅人の世話をする人を置くなど、宿場町としての機能を与えられることになりました。

次号は江戸時代の富谷宿の様相を紹介します。

（執筆：富谷市民俗ギャラリー 学芸員 清水勇希）



1823(文政6)年に吉川十兵衛によって描かれた「富谷村御絵図」(朱色太線は奥州街道)